

石巻市



# 文化財だより

=田代島特集=

もくじ

発刊のあいさつ	1
刊行にあたって	2
田代島調査に至るまでの経過	2
仁斗田貝塚の概観	3
金石文・経塚について	5
平塚八太夫文書について	7
田代島の神社伝聞	10
漆草刈山所在古跡群の移転	12

## 廻船手形

仁斗田、平塚ツナ氏宅に所蔵されている廻船手形である。右は縦17センチ・横9・4センチ、左は縦17センチ・横9・9センチの大きさで、同家にある多数の貿易関係文書とともに幕末期の交易廻船資料として貴重である。



## 創刊にあたって

石巻市教育委員会  
教育長 近江義雄



近江義雄

査が活発に行なわれ、それに伴う学術研究が進められるにつれて、古代史の解明に偉大な貢献がもたらされつあることは、すでにみなさまも承知のことおりであります。

当市におきましても、文化財保護条例の設置いらい、市内各所に散在する古代の遺跡をはじめ神社、仏閣、民家等の有形文化財や各種民俗資料、郷土芸能その他無形文化財等の調査、収集、研究を推進して参りましたが、その成果、紹介等を広く市民ならびに関係各位にご高覧ご利用いただくため、このたび機関紙「石巻市文化財だより」を発刊することになりました。創刊号は、昨夏、石巻市文化財保護委員会各位によって行なわれました。田代島の学術調査の概要をとりまとめたものであります。

この機関紙を通じ、市民ならびに関係各位の文化財に対する愛護意識の高揚等を認識をさらに深めていただければ幸甚存します。今後この機関紙が、石巻市ならびに石巻地方における文化財保護の推進に資することを念じて創刊のごあいさつといたします。





## 三、自然遺物

次に当貝塚で発見された動物遺骸について概略を述べよ。

貝の種類はほとんどが貝巻を中心とした岩礁性の貝で占められていて、内湾との相違は著しい。その他の魚骨、鳥骨、海獣骨が多いことも特徴の一つでシカの骨は少ない。

## ●人 骨

左下顎骨一点が出土してて、推定年令三〇～四〇才の男性である。 $P_1$   $P_2$  および大臼歯が遺存し、歯冠部が平坦に摩耗しているので鉗子状咬合であつたと考えられる。

## (計測)

下顎骨の角度  
下顎角から下顎頭までの高さ

六・二センチメートル  
下顎頭と筋突起間の最大幅  
四・七センチメートル

歯槽弓 ( $M_2$ ) から下顎底までの高さ  
一・七五センチメートル

歯槽弓 ( $M_2$ ) から下顎底までの高さ  
一・七五センチメートル  
最大厚

一・七五センチメートル

## ●貝 類

カキ、ザザエ、アワビ、アカガイ、ツメタガイ、アカニシ、レイシ、イガイ、ユキノカサ科、ニシキウズ科、エゾバイ科  
●魚骨・海獣骨  
マグロ、マダイ、スズキ、サバ、カワ

ハギ、ソイ、エイ、ウミガメ、アシカ、クジラの類

## ●歯骨・鳥骨

歯骨は、シカ、イヌ、の二種が認められる。鳥骨は多數認められるが、種名の判明調査が未了であるため記載できない。

## ◆仁斗田貝塚

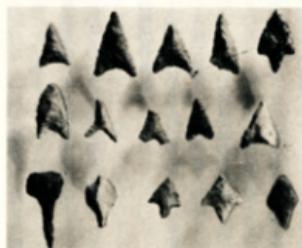
## 出土遺物実測図

## (図版説明)

- ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ 石 小 刀
- 土 製 品 石 製 金 錠 錐 鋸
- 石 製 垂飾品



## ◆仁斗田貝塚出土石錠



- 1 稲荷神社 3 満福寺 5 愛宕神社 7 鹿島神社  
 2 平塚ツナ家文書 4 仁斗田貝塚 6 十三塚 8 松盛院



### 一、板 碑

文化財保護委員 佐 藤 雄 一

田代小学校裏手の高台にある愛宕神社の境内にある。田代島において年代の刻まれている板碑は、この一基だけである。

書体は、流麗で堂々としている。篆文ではなく、單に「右志者為聖靈也」とのみあり、随分と簡略化されている。杜鹿半島にも女川湾ぞい太平洋とともに板碑は確認されているので、杜鹿半島に近い田代島に「延元三年」の板碑があつても不思議ではない。石材は粘板岩(稲井石)であるので、石巻近辺から運ばれてきたのだろう。製作地は田代島か、それとも石巻近辺かという問題もあろうが、それは石巻近辺とみるのが妥当だろう。

### (A) 延元三(一一三三八)年八月日

高さ - 93 cm 幅 - 30 cm 厚さ - 9 cm

### 種子文 粘板岩



### 大泊・松盛院山門側

「願以此功德 普度於一切 我等與衆生 皆共成仏道」という偈文と、種子文があるだけで、年代の記載はない。この碑は大泊海岸の砂中より発掘されたものという。その後、松盛院に移されたと伝えられている。

### (B) 無年号

高さ - 76 cm 幅 - 11 cm 厚さ - 11 cm

### 種子文 粘板岩



この碑は、現在松盛院山門脇にあるが以前は開山の設年が大永三(一五六三)年といふ玉泉庵なる庵寺の跡にあったものが何時頃か、現在の場所に移したとつたとされている。  
 玉泉庵の古さといい、種子文の彫りかたといい、種子だけであるが、中世のものとみて間違いないようである。

☆

☆

☆

## 金石文・経塚について

(C) 無年号  
高さ - 66 cm 幅 - 16 cm 厚さ - 13 cm  
種子文  
粘板岩



二、石 仏

田代島石仏の種類は地蔵一種といってよく、この他に馬頭観音の文字塔があるだけである。

地蔵の石材は、写真①②③にみられるよう、凝灰岩であり、写真④⑤のようないくつかの凝灰岩である。凝灰岩のものが時代も新しいようである。凝灰岩のものはその輪郭を残すだけで、くわしい様子をさぐることはできないが、独特のやらかさがあり、他にみられない優雅さをたたえている。

(2) 満福寺境内



(1) 満福寺境内



(4) 満福寺境内



(3) 満福寺境内



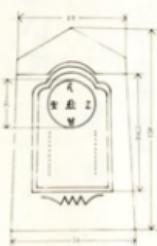
三、馬頭観音文字塔

仁斗田満福寺境内に一基の馬頭観音文字塔がある。天保五年、六年の造立である。馬頭観音は、一般には馬を使用する人々によって信仰されたと考えられているようであるが、それは江戸中期以後のことである。馬頭観音は弥陀の変身したもので、慈悲で救い難い衆生のためには仏が怒りの姿をもって救あけようとしたものであるといふ。変化観音の一つである。満福寺の文字塔は、天保五、六年の造立であるので、おそらく馬を使用した人々によって造立された民間信仰の現われであると考えられるが、馬とはあまり関係はない。

田代島の馬頭観音文字塔は、いわゆる馬頭観音の由来である。馬頭観音の功徳を知つての造立であろうか。

## 四、題 目 碑

仁斗田船着場の左側台地に太平洋に向かって高さ一米九〇cmばかりの題目碑が立っている。安政四年の造立で、世話人は相沢屋金右衛門である。「一天四海皆福妙法海上安全天下泰平国土安穩大漁滿作」とあるように、造立の趣旨は明らかである。田代島に日蓮宗信仰のあとをさくても、全くその傾向はない。



● 十三塚上の石碑 (単位センチ)

田代島中裏手から大泊方向に並んでおり現在六個を確認できる。中学校裏手のものが保存もどき、塚上に図のよくな碑がたつている。以前、この塚中から一字一石が出土したといわれ、経塚に類するものかもしれない。塚は長辺七・七メートル、短辺六メートルの方形で高さ一・六メートルである。

## 五、十三 塚

田代島中裏手から大泊方向に並んでおり現在六個を確認できる。中学校裏手のものが保存もどき、塚上に図のよくな碑がたつている。以前、この塚中から一字一石が出土したといわれ、経塚に類するものかもしれない。塚は長辺七・七メートル、短辺六メートルの方形で高さ一・六メートルである。

ただ、流入として田代島に送られ、寛文四年(一六六四)年に没したといわれる日東和尚が、日蓮宗を信仰した人といわれている。

しかし、この題目碑は日東和尚とは直接のかわりあるいはないと想う。石材は粘板岩であり、高さは地上一米九〇cm、幅は一米二十七cm、厚さ二十二五cmといふ。巨石は船の発達した江戸末期に石垣地方において作成せられ、田代島に運ばれてきたものであろう。

## 石巻市文化財だより

## 平塚八太夫文書について

文化財保護委員 木村敏郎

平塚八太夫家は代々与治右衛門を名乗

エトロフ・クナシリの警備を命じた。

ついたが、当主（十年前に死去、現在令夫人のみ淋しく暮している）の六代前から肥料や海産物の仲買いをしてい

たといふ。

八太夫は与治右衛門の先妻の子で、生後間もなく母を失った。少年時代から水夫として働き、いつしか那珂湊に出て水戸藩御用達商人内五郎右衛門の船に乗組むようになった。やがて駆のいい船頭として認められ、五郎右衛門の右腕として働くようになった。

大内五郎右衛門が全財産を投げ出して親船三隻に運貨を満載し、松前を往復して千五百両の巨利をせしめた折、八太夫はその働きにより親船一隻と三百両を分与してもらい、自ら蝦夷地貿易に乗り出こととなつた。八太夫三十才の時の

天保九年（一八三八）かくして得手九を持船とした八太夫は、船頭金大夫と共に事業を拡大、北海に活躍することとなつた。

前後して黒船が来航して国内に危機感がみなきり、北邊がさわがしくなると、幕府は、安政一年（一八五四年）二月蝦夷地を直轄地とし、さらに四月仙台藩に対して東蝦夷地東部（ユウツク・ネムロ・

受け平塚八太夫を名乗るようになった。八太夫は慶応二年（一八六六年）那珂湊に寄死して六十余才の創的な生涯を閉じた。

田代島漁業の振興において貢献している。

八太夫活動のロマンは、先に太倉淳先生が、市報（昭41・11・1号）「那珂湊見書」や石巻日日新聞（昭41・11・3号）「偶然でない姉妹都市緑結び——藩政時代からの深い御縁」紙上で述べておられるので紹介しておきたい。

明治四十一年田代島仁年田大火災のため、八太夫の屋敷も土蔵一つを残して消失した。ここに紹介するのは幸いにして火災を免れた八太夫文書の一部である。

数多くの文書は、平塚八太夫の偉大な足跡可された蝦夷地東半を所領とすることとなつた。

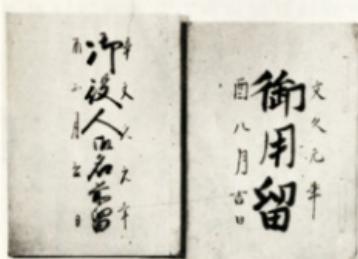
財政面にあたる仙台藩は、蝦夷地経営と開発に当つて商人の経済力を利用したのは当然であり、商人もまた利権を得て巨利を求めていた一方で、安政五年には浜

得手丸八太夫も、安政二年早くも相続料であり、仙台藩の経済の要津都市石巻を知る財産である。

八太夫の死後、時代は激動して明治を迎える、その子善三郎の代になると、善積

した資本を投入して四挺大綱をはじめ、

●平塚ツナ家文書









▲聖観音座像  
(松盛院)

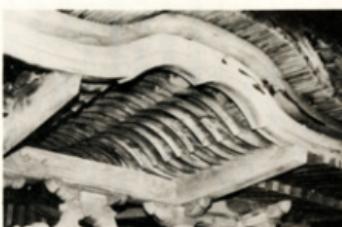


▲稻荷神社奥の院建築

◀ 同上



▲満福寺田記録写



▲満福寺秘仏



▲稻荷神社関係文書

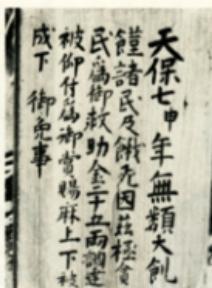


▲満福寺象仏講

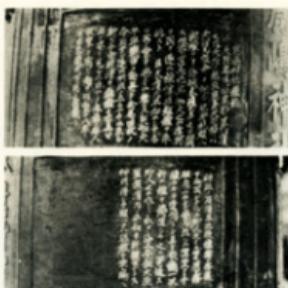


◆鹿島神社鍾銘

## 文化財ニュース



▲阿部功氏所蔵／麻上下石碑



## 湊草刈山所在古碑群の移転

石巻市教育委員会では、昭和47年から市内に存在する各種文化財の、所在地や数量、内容等を把握するため、文化財の分布調査を行ってきましたが、そのうちで中世の石巻の歴史を研究するうえに非常に貴重な資料となる板碑が、市内には、たくさん存在することが確認されました。まだこれら板碑の個々について精査する段階までは至っていませんが、現在のところ、推定一百基以上の板碑が市内に存在するだらうと思われます。

これらの場所には、管理者や、その所属権が不明確なため、無管理状態のものが多く、文化財保護上憂慮される状態のものが多くあります。

草刈山にある、古碑群も、こつした状態にあつたもので、民家の裏手の崖面に倒壊前の状態であつたものを、昭和四十七年十二月多福院境内に移転、建立したもので、総数十六基あります。

この移転された板碑は、最大で二九五センチメートル、小さいもので九五センチメートル程度、小さな碑は部分的に欠損しているのが大部分です。一般に分厚い感じのものが多く、これは、現在多福院に保存されている小型の板碑とくらべてすこぶる特徴的なことで、年代的には、永仁二年（一一九三）

が最も古く、応永二十四年（一四一七）までのものが確認されます。その中に延元三年、興國三年といった南朝年号のものが三基あり、鎌倉時代から南北朝の争乱期を通じて、室町時代初期にかけて造立されていることがわかります。

更に「吉野先帝御善提碑」に表現されている「奉為……」といった形式のものが四基あることです。これは「吉野先帝御善提碑」が鎌倉、南北朝時代の形式をふまえているということです。吉野先帝碑の研究にとても貴重な資料であると考えられます。その他、葛西氏の第七代良清公（法名一蓮阿）のための板碑がこの中に確認されたことで、そうした点から

移転した草刈山古碑群が、中世史研究の上で非常に貴重な内容をもつたものであることが確認されたわけです。

この移転事業は、昭和四十七年十二月五日～二十五日まで行われ、「吉野先帝御善提碑」の東隣りに建立、整備されました。市教育委員会では、今後年次計画で、危険にさらされたり、早急に保護が必要とするようなるのか、具体的に保護施策を行う計画ですが、今年は、稲井水沼安樂寺跡所在の板碑群、約十基の移転に現在着手中です。移転後は、多福院同様、説明板を設置して、一般への公開をはかりたいと考えております。



印刷／(株)三友社  
監修／石巻市文化財保護委員会

創刊号 年2回発行

表紙題字は近江義雄教育長

## ▼移転後整備された板碑



昭和四十九年一月一日発行



▲移転前の状況

▲移転中の状況